

エノケン喜劇『最後の伝令』（1931）と フランク・キャプラ映画『陽気な踊り子』（1928） ——喜劇にみるアメリカ映画のアダプテーション——

中野 正昭

1 はじめに

「昭和の喜劇王」として人気を博した「エノケン」こと榎本健一（1904—1970）の主演作の中でも、軽演劇あるいはアチャラカ喜劇の傑作として名高い作品が舞台『最後の伝令』（1931）である。

『最後の伝令』は、榎本が原案としてアイデアを出し、これを文芸部の菊谷栄が脚本にまとめたもので、榎本の生前はもちろんのこと、現在でも度々再演されている。例えば近年では、劇団「浅草21世紀」が、2014年に浅草木馬亭で上演した『最初で最後の伝令』（戦後のエノケン文芸部に在籍した平島高文の補綴）が芸術祭奨励賞を受賞した。エノケン文芸部出身の井崎博之は「今も昔も、この手の喜劇は可成りあって、コメディアンは必ずといっていいほどに一度は演じているが、この、エノケンの「最後の伝令」ほど、すばらしいアチャラカ喜劇はない、と断言できる」¹と記している。

菊谷栄はエノケンの右腕として生前から高い評価を得ていた脚本家・演出家で、近年では、三谷幸喜の人気作『笑の大学』（1994年のラジオドラマ版を1996年に舞台化、2004年に映画化）に登場する劇作家のモデルになったり、扉座『最後の伝令 菊谷栄物語

1937津軽～浅草』（横内謙介作・演出、2019年）が上演されるなど、喜劇の世界では伝説的な人物として知られてきた。舞台以外でも、井上ひさしがエッセイ「軽演劇の時間」（岩波叢書「文化の現在」第7巻、『時間を探検する』、岩波書店、1981年、所収）で、同じ劇作家の立場から菊谷の劇作法の巧みさを指摘したり、平島高史『エノケン喜劇のドラマツルギ 榎本健一と菊谷栄が見た夢』（日本芸術文化振興会、2013年）、山口昌男『エノケンと菊谷栄 昭和精神史の匿れた水脈』（晶文社、2015年）といった研究書が出版されるなど、近年、再評価の動きのある人物である。人々に愛された喜劇王と伝説的な作・演出家が組んだ傑作ということもあって、『最後の伝令』は日本の喜劇史の中で特別な存在として扱われてきた。

しかし、この『最後の伝令』が、エノケン一座のオリジナル作品ではなく、アメリカ映画『陽気な踊り子』（1928）に登場する劇中劇『アロンに帰れ』を脚色したものである可能性が高いことは、これまで指摘されてこなかった。本稿では、『最後の伝令』と『陽気な踊り子』及びその劇中劇『アロンに帰れ』の共通点・類似点を検証し、『最後の伝

令』がアメリカ喜劇映画の脚色（アダプテーション）の可能性が高いことを確認したいと思う。さらに、なぜこれまでエノケン喜劇の最高傑作が欧米娯楽作品の脚色であることが指摘されなかったのかという日本の喜劇史研究についての問題について考察してみたいと思う。

2 舞台『最後の伝令』の台本

『最後の伝令』は1931（昭和6）年、浅草玉木座が運営する劇団「プペ・ダンサント」で初めて上演された。プペ・ダンサントは、幾つかの劇団を集めた混成劇団として1930年に組織され、エノケンらもその一つとして同劇団に参加していた。

初演の月には諸説あり、11月とする文献が多い²。初演時の正式タイトルは“悲涙血涙 戦争哀話 大悲劇『最後の伝令』（四景）”とされており、これは後述の青森県立図書館所蔵、菊谷栄自筆台本からも間違いのないと思われる。原案は清野鉄一（榎本健一の筆名）、脚色は佐藤文雄（菊谷栄が佐藤名義で発表）となっている³。

初演以降も「ピエル・ブリヤント」（プペ・ダンサントから独立し、1931年12月にエノケンと二村定一の二枚看板で旗揚げ）などエノケンの劇団で再演を重ねた。戦後は、1955（昭和30）年9月に日本劇場で催された、喜劇人協会主催、第二回東京喜劇まつり『アチャラカ誕生』（構成：榎本健一、古川ロッパ、柳家金語楼、演出：山本紫朗）の中、浪花節歌舞伎「太閤記十段目」、オペレッタ「カフェーの夜」らと共に劇中劇のひとつとして上演された。同作は翌56年には『極楽大一座 アチャラカ誕生』（脚本：白坂依志夫、監督：小田基義）の題名で映画化され、映像にも収められた⁴。

複数の組織が上演を手掛けていることもあり、現在入手できる『最後の伝令』の台本は数種類ある。まずは最も古いものとして次のものがある。

①青森県立図書館所蔵、菊谷栄自筆原稿『悲涙 血涙 戦争哀話 大悲劇 最後の伝令』（四景）。

これは原稿用紙に書かれたもので、草稿ではなく上演台本の控えだとされている。原稿の末には「一九三一・六・一七」と日付が記されており、先の初演月とされる11月より約半年前に書かれたことが分かる。当時の浅草興行界の常識から考えて、出来上がった台本を半年も寝かせておくとは考え難く、実際の初演は11月よりも早い可能性がある。

他に活字化され、書籍として刊行されたものに、次の二つがある。

②北の会・北の街社編『昭和のモダニズム・菊谷栄』（北の街社、1992年）所収の台本。これは①の青森県立図書館蔵の菊谷自筆原稿を翻刻したものの。

③高平哲郎『アチャラカ』（ビレッジセンター出版局、2004年）所収の台本。戦後に、

放送作家・演出家の高平と俳優の三木のり平が手を加えた改訂版。

他に演劇博物館所蔵の上演台本として、次の二つの存在を確認した。

④台本『アチャラカ誕生』（喜劇人協会作）。台本記載のクレジットはプログラム等とは異なり、「喜劇人協会」の「作」となっている。

⑤台本『南北悲話』（喜劇人協会作・改訂版）。上演年等の詳細は不明。

本稿では、以下、初演に最も近いと考えられる①をもとに、適時②の翻刻で補いながら、『最後の伝令』について分析を進めて行く。

3 劇中劇形式と「南北戦争」という題材

『最後の伝令』は、ある劇団が上演する芝居“大悲劇『最後の伝令』”の舞台の表裏のドタバタを描いた、劇中劇風のシチュエーション・コメディとなっている。“大悲劇『最後の伝令』”を上演する劇団は、俳優不足、稽古不足が禍し、肝心の舞台は大混乱、あまりのお粗末さから、真面目な悲劇が一転して爆笑喜劇になってしまうという、楽屋落ちの笑いを前面に展開したメタ演劇的な構成になっている。

『最後の伝令』は、実際に観客が眼にする舞台の割緞帳前から始まる。既に開幕時間は過ぎたのに、一向に幕が上がらない。やがて、「お父さん」（登場人物のひとり「メリイ」の父親）役の俳優と「トム」（メリイの恋人。初演以降、榎本健一がつとめた）役の俳優が登場して、こんなやりとりを交わす。

割緞帳前

お父さん やきもきして登場、と反対から一兵士に扮したトム登場

お父さん おい トム 困るじゃないか まだ舞台の仕度も出来ていないのに幕を開けてしまって

トム 畜生！ またあの監督の奴 早トチリしやがって・・・・・・・・ よし
僕があいつの所へ行ってはり倒してやる

お父さん 駄目だよ そんなことをしていちゃ・・・・・・・・ 何しろ もう 幕を開けてしまったんだからな・・・・・・・・ まあ それより お前 口上をやらしてくれ

トム 口上！ 冗談じゃない 僕は元来あまり頭脳明晰の方じゃないから そんな偉そうな真似は出来ないよ

お父さん 何でもいいんだ 活動写真の前説知っているだろう 今回 今度 御覽に供しますは・・・・・・・・ あれだよ やってくれ 何でもいいんだ お客さ

んをごまかして つないでいれぁいいんだからな
トム そうか じゃお父さん やるよ
お父さん たのむ
お父さん退場
トムてれ臭そうに舞台中央迄来て観客に一礼して⁵

こうしてトム役俳優の俳優は急遽前口上をはじめのだが、何を喋って良いかが思いつかずシドロモドロ、どうしたものかと困っているところに、再びお父さん役俳優が顔を出し「おい トム もう三分位つないでくれ」と、更なる引き延ばしを頼む始末。そうこうするうちに、やっとのことで幕が開く。

台本では、この緞帳前のやりとりが第一景となっており、第二景の「老將軍の家の前」の場面になって、ようやく“大悲劇『最後の伝令』”の芝居が始まるという仕掛けだ。

『最後の伝令』で注目されるのは、メタ演劇的な劇中劇の構成の斬新さもさることながら、作中の時代・場所の設定である。ト書には、時は「アメリカ合衆国南北戦争の頃」、所は「北部アメリカの片田舎」とあり、アメリカ南北戦争が設定されている。お父さんは北軍の老將軍、トムも北軍の兵士となっている。戦前から現在までを見渡して、日本の創作物でアメリカ南北戦争を題材とした作品は、演劇はもとより他の文芸ジャンルでも珍しい。敢えて南北戦争を選んだ『最後の伝令』の特異さ、言い換えれば不自然さを、ここに見ることができるだろう。

3 映画『陽気な踊り子』

『最後の伝令』が作品のもとにしたと考えられるのが、アメリカのサイレント・コメディ映画『陽気な踊り子』（原題 *The Matinee Idol*、コロンビア映画社）である。映画のクレジットには、From the story “Come Back to Aaron” by Robert Lord and Ernest S. Pagano とあり、これがロバート・ロードとアーネスト・パガノの『アロンに帰れ』を映画化したことが分かる。しかし、この『アロンに帰れ』が、小説や戯曲などの既発表作品で「原作」にあたるものなのか、それとも未発表の所謂「原案」にあたるものなのかは、今回の調査では判明できなかった。また、『陽気な踊り子』本編の中で、『アロンに帰れ』は劇中劇の芝居の題名を指すのだが、果たして原作・原案としてみた場合、これが劇中劇の芝居の題名のみを指すのか、それとも劇中劇構造をもつ映画全体を含むのかについても明らかにはできなかった。

映画『陽気な踊り子』の脚本はエルマ・ハリス、監督はフランク・キャブラで、1928年3月にアメリカ公開、同年11月に日本で公開された。『陽気な踊り子』は、アメリカ公開後、フィルムが行方不明となり、長らく名匠フランク・キャブラ監督の「幻の映画」とされてきたが、1990年にフィルムが発見され、1997年に復元され、DVDが発売された。その後、日本でもDVDが発売されている⁶。上映時間はオリジナル版が66分だが、現在

見ることができる復元版は55分となっており、全体の20%以上の場面が失われたままだ。

物語を確認しておこう¹。プロ ドウエイの人気コメディアン、ドン・ウィルソン（ジョニ・ウォカ）と劇場支配人のウィング トら四人は、次回作の着想を得るために、アメリカの片田舎へと小旅行に出る。ある小さな田舎町で、旅廻りのポリヴァ 一座が俳優募集をしているところに出くわしたドンは、ポリヴァ の娘ジンジャ（ベシ・ラヴ）に見込まれ、雇い入れられる。一座の演目は、南北戦争で引き裂かれる恋人たちを描いた悲劇『アロンに帰れ』（二幕）だが、素人同然の田舎芝居とあって、演者たちが大真面目に演じれば演じるほど、演技の拙さや大道具・小道具の失敗が目立ち、かえって観客の笑いを誘ってしまう。ウィング トは、これをプロ ドウエイに持っていけば爆笑喜劇として成功間違いないと考え、計画を進めるのだが、ドンはそれが一座の人々に残酷な結果をもたらすのではないかと危惧している。

プロ ドウエイにやってきたポリヴァ 一座は、当人たちの思いとは裏腹に、観客の大爆笑を巻き起こし、興行的には大成功を収める。だが、自分たちの芝居が喜劇として扱われたことにショックを受けた一座の人々は、失意のうちに劇場を後にする。なかでもジンジャ は、大根役者だと思っていたドンが、実は人気コメディアンで、この計画を最初から知っており、舞台ではわざと下手な演技をしていたことに裏切られた思いだった。しかし、ジンジャ に恋心を抱き始めていたドンは、彼女に罵られながらも、自分も一座に加わりたいと申し出る。はじめジンジャ は、ドンの申し出を断ろうとしたが、それは出来なかった。既にジンジャ もドンに恋をしていたのだった。

『最後の伝令』は、『陽気な踊り子』の劇中劇『アロンに帰れ』のドタバタ振りを、そのまま抜き出してひとつの作品とした形になっている。ただし、『アロンに帰れ』は通常通りに幕が開いて舞台が始まるのに対し、『最後の伝令』は冒頭に割緞帳前でのやりとりを加えるなど、笑いどころに関する細部では相違も見られる。では、次に『アロンに帰れ』と『最後の伝令』の異同を確認してみよう。

4 『アロンに帰れ』と『最後の伝令』

二つの作品の構成を、筆者が作成したプロット表【別紙】をもとに比べてみよう。『アロンに帰れ』（二幕）と『最後の伝令』（四景）では、先に見た時・所他に、基本的な物語・人物の設定と展開が共通している。簡単に箇条書きしてみよう。両作品に共通するエピソードは「●」で、『アロンに帰れ』のみは「◆」で、『最後の伝令』のみは「▲」を附す。なお人物名は、『アロンに帰れ』は不明が多いため、『最後の伝令』に従った。

『アロンに帰れ』（二幕）

【第一幕／夏、北軍の老将軍の家の庭】

- 老将軍が娘メリイと、次いで妻と別れの挨拶をし、出征する。
- ◆文書を持った北軍指揮官が、南軍に追われて登場。助けを求められたメリイは、文

書を預かり、彼を屋敷に匿う。

●メリイが文書を預かる。

◆追ってきた南軍指揮官が、メリイを捕らえようとする。そこを北軍指揮官が助け、南軍指揮官を追い払う。

【第二幕／冬、老将軍の家の庭】

●北軍と南軍の戦闘。

●メリイの前に、負傷したトムが現れる。

●トムは、メリイの腕に抱かれたまま死亡する。

●戦闘で北軍が勝利する。

『最後の伝令』（四景）

【第一景／緞帳前】

▲準備が間に合わず割緞帳前でトムが口上を述べる。

【第二景／冬、老将軍の家の庭】

●老将軍が娘メリイと、次いで妻と別れの挨拶をし、出征する。

▲老将軍の娘メリイの恋人トムも出征する。

【第三景／塹壕】

●北軍と南軍の戦闘。

▲トムが伝令を持って、塹壕を出て行く。

【第四景／冬、教会の前】

▲ロバートがメリイにトムの戦死を告げる。

▲トムを失った悲しみから、メリイは生まれたばかりの赤ん坊を残して自殺しようとする。

●そこに負傷したトムが、伝令を持って現れる。

●メリイが伝令を預かる。

●トムは、メリイの腕に抱かれたまま死亡する。

●ロバートがやって来て、北軍の勝利を告げる。

二幕か四景かに関わらず、どちらも「メリイの父である老将軍の出征」「北軍と南軍の戦闘場面」「メリイの前に、負傷したトムが現れる」「メリイが文章・伝令を預かる」「トムは、メリイの腕に抱かれたまま死亡する」「北軍が勝利する」という基本的な展開は同じで、『最後の伝令』が景と人物を追加しているのが分かる。また文書・伝令が登場する点、さらにこの文書・伝令をメリイが読みあげると、間違っても「差し押さえ書」だったというギャグ（プロット表：『アロンに帰れ』第一幕-18／『最後の伝令』第四景-11）も同じである。

両作品で共通のギャグは他にもあり、軍隊の行進を銃剣だけを並べた小道具のトリックで見せる、それが観客にバレる、メリイ役女優の早替わり、俳優が順番を間違えて登場

する、小道具の雪が足りなくなり舞台上に降らしたものを急いで掻き集めて再び降らす等々、細かな部分までそっくりそのままのものが多数ある。

類似点は舞台装置にも見られる。『アロンに帰れ』の第一幕、第二幕と『最後の伝令』の第二景、第四景は、物語の展開は似ているが、『アロンに帰れ』がどちらの幕も場所は「老将軍の家の庭」【図1】で統一されているのに対し、『最後の伝令』は「老将軍の家の庭」「池の端の教会の前」と異なる。しかし、戦後の舞台『アチャラカ誕生』の舞台写真【図2】を見ると、『アロンに帰れ』の「老将軍の家の庭」と『最後の伝令』の「老将軍の家の庭」「池の端の教会の前」の三つの舞台装置は、舞台上手に建物、正面奥に煉瓦塀が置かれ、非常によく似た作りになっているのが分かる。そして映画『極楽大一座アチャラカ誕生』では、「老将軍の家の庭」と「池の端の教会の前」【図3】は小道具を置き換えただけで、基本的なセットは同じものを使い回すというギャグになっている。初演の『最後の伝令』がどのような舞台装置を使用したかは不明だが、『アチャラカ誕生』を参考にする限り、やはり舞台装置の点でも『アロンに帰れ』との類似が見られる。

いずれにせよアメリカ南北戦争という設定、物語、ギャグの共通、加えて舞台装置の類似から考えて、『最後の伝令』が『アロンに帰れ』の内容を、そしてその失敗を劇中劇の形で見せる『陽気な踊り子』の構造を借り、脚色した作品であることは間違いないだろう。

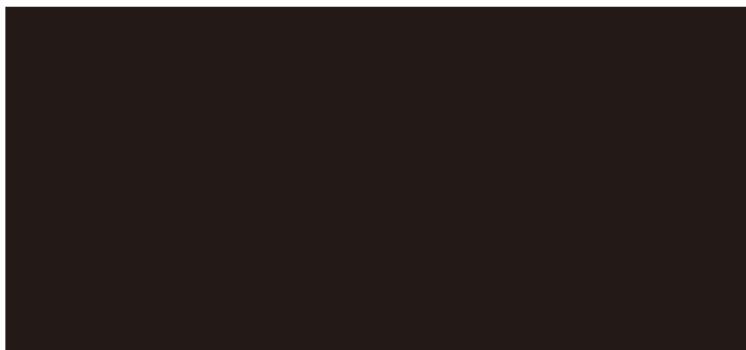


図1 映画『陽気な踊り子』より劇中劇『アロンに帰れ』の「老将軍の家の庭」の場面。

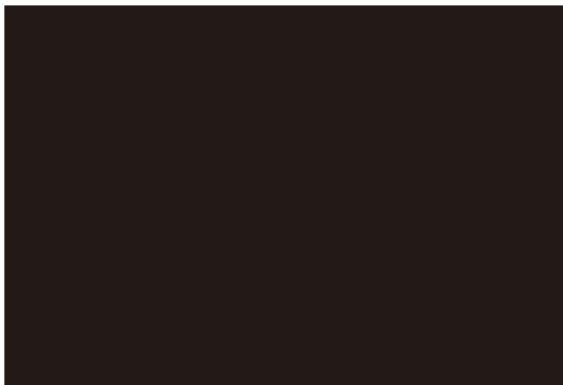


図2 舞台『アチャラカ誕生』より『最後の伝令』第四景。舞台上手に建物、正面奥に煉瓦塀があり、『アロンに帰れ』とよく似ていることが分かる。

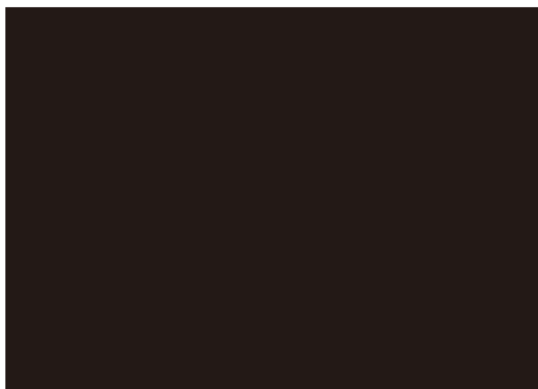


図3 映画『極楽大座 アチャラカ誕生』より『最後の伝令』第四景。

5 『最後の伝令』のオリジナル・ギャグ

『最後の伝令』には、『アロンに帰れ』にはないオリジナルのギャグも多数ある。俳優が台詞を忘れたため監督（舞台監督）がプロンプターをつとめる、俳優が監督に教えられた台詞を言い間違える、小道具の水が本物のお酒にすり替わっていて呑んだ俳優たちが酔っ払う、教会の鐘が日本式に「ボン」と鳴る、雪に火が着いてボヤ騒ぎを起こす等々。なかでも監督を使ったギャグは、作品全体を通じて繰り返し登場する。台詞を忘れた俳優に監督が台詞を教えたり、教えられた台詞を俳優が言い間違えるというのは、実際の舞台ならではのもので、サイレント映画では難しいだろう。こうしたギャグは、榎本健一のアイディアに負うところが大きかったとされ、喜劇王と称された榎本のギャグマンとしての引き

出しの多さを知ることができる⁸。

ただし留意しておきたいのは、この監督の存在にも『陽気な踊り子』の影響を見ることができるといふ点だ。『陽気な踊り子』では、劇中劇『アロンに帰れ』とその失敗を見て大笑いする観客を交互に見せることで、実際に映画を見ている者の笑いを誘うようになっている。一方の『最後の伝令』では、監督が、ちょうど漫才のボケとツッコミのツッコミ役のように、俳優達の失敗を叱る（ツッコミを入れる）ことで、笑いどころを明確にしている。つまり、『陽気な踊り子』の中で劇中劇に爆笑する観客と、『最後の伝令』の監督は、どちらも笑いどころを明確にし、現実の観客の笑いを誘い出す役割を担っているのである。映画から舞台へ、笑いの巧みなアダプテーションの例だといえるだろう。

6 『アチャラカ誕生』における改定版『最後の伝令』

次に、戦後に喜劇人協会が上演した『アチャラカ誕生』と、そこでの改訂版『最後の伝令』を見てみよう。ここで注目したいのは、『アチャラカ誕生』の物語と劇中劇『最後の伝令』の扱い方だ。

『アチャラカ誕生』は、古川ロッパ演じる「劇場主兼興行主兼舞台監督兼宣伝部」の六太郎率いる地方劇団「大福座」の物語となっている。何とかして大福座を東京へ進出させたいと願う六太郎は、東京の女学校に通う娘のマサ子とその同級生で東京の大興行会社の娘キヨ子に、いくつか演目を見せて判断を仰ぐことにする。その演目のひとつが大悲劇『最後の伝令』で、芝居は例の如くメチャクチャになって終わる。客を大いに泣かせるはずの悲劇が、客に笑われたのでは大失敗だ、と六太郎と座員一同が落胆しているところに、キヨ子の父が現れ「君は天才だ、あんな面白い喜劇は東京にもない。君は大成功だ、わしは君の芝居を買うよ」と、彼らを大絶賛する。こうして大福座は喜劇一座として東京へ進出、ここにアチャラカ喜劇の誕生となるのだった⁹。

『アチャラカ誕生』の内容が、『陽気な踊り子』からメロドラマの要素を抜いたものになっていることが分かるだろう。また、劇中劇『最後の伝令』の改訂台本は、先に見た菊谷台本から大幅に整理され、『アロンに帰れ』とさらに似通った構成に変更されている。菊谷台本から削除された部分を一重線で消してみよう。

『最後の伝令』（四景）

【第一景／緞帳前】

▲準備が間に合わず割緞帳前でトムが口上を述べる。

【第二景／冬 → 夏、老将軍の家の庭】

●老将軍が娘メリイと、次いで妻と別れの挨拶をし、出征する。

▲老将軍の娘メリイの恋人トムも出征する。

—【第三景／塹壕】—

●北軍と南軍の戦闘。

▲トムが伝令を持って、塹壕を出て行く。

【第四 → 三景／冬、教会の前 → 老將軍の家の庭】

▲ロバートがメリイにトムの戦死を告げる。

▲トムを失った悲しみから、メリイは生まれたばかりの赤ん坊を残して自殺しようとする。

- そこに負傷したトムが、伝令を持って現れる。
- メリイが伝令を預かる。
- トムは、メリイの腕に抱かれたまま死亡する。
- ロバートがやって来て、北軍の勝利を告げる。

第二景の季節が「冬」から「夏」へ変わったこと、第三景の塹壕場面がなくなったこと、最後の場所が「教会前」から「老將軍の家の前」へと変わったことで、冒頭の割綴帳前の口上を除けば、芝居本編の構成は『アロンに帰れ』と同じ全二景となっている。『最後の伝令』のみに登場した、メリイとトムの赤ん坊が設定から消えたのも顕著な変更点だ。『アチャラカ誕生』の『最後の伝令』は、本来あるべき姿の劇中劇として作品の中に収めることで、劇団を主人公とする物語全体の結末こそ正反対だが、『陽気な踊り子』と『アロンに帰れ』の関係や内容と非常によく似たものへと改訂されている。

古川ロッパの日記によれば、当初、第二回東京喜劇人まつりでは渋谷天外が脚本を書く予定だったが、急病でこれを辞退することになり、次いで山下与志一が『昭和不出世物語』を書いたが、関係者の全員が山下の脚本に満足せず、「そんなら我に案あり、先日来たためてゐた、アチャラカの起源とも称すべきストリを話すと、皆々これに賛成。昭和初期東京の景では「カフェの夜」をやればいゝとエノケンの意見。これで節劇「太閤記十段目」、「カフェの夜」、「最後の伝令」とつゞく。「太十」は金語楼が書き、この三つを綴り合わせて、筋を作るのが我となる」という経緯で、二転三転とした結果『アチャラカ誕生』へ変更になったとある¹⁰。『最後の伝令』を主軸とした物語にするというのもロッパの案である。ロッパは、喜劇俳優になる以前は映画記者をしており、特にアメリカ映画に造詣が深かったが、この企画会議の時のロッパの頭の中では『陽気な踊り子』がイメージされていたのではないだろうか。単なる偶然とは考え難いほどに、『陽気な踊り子』と劇中劇『アロンに帰れ』、『アチャラカ誕生』と劇中劇『最後の伝令』の構造は非常によく似たものに仕上がっている。

『陽気な踊り子』では、真面目な悲劇が観客には喜劇として受けとめられ、座員一同が失意のうちに劇場を去ることになるが、『アチャラカ誕生』では、この結末を裏返し、最後は新しい喜劇の誕生というハッピーエンドに変えてみせている。しかし、そもそも『アロンに帰れ』の場面は、物語の上ではお粗末な芝居が笑いものになるという皮肉なものとして描かれるが、映画の要素としては笑いどころとして作られている。その意味では、『アチャラカ誕生』の結末は、同じ劇中劇構造を持つ物語をメロドラマ映画から喜劇舞台へと変換してみせただけでなく、『陽気な踊り子』が日本の観客に教えたであろう新しい

タイプの笑い——真面目に悲劇を演じれば演じるほど、その失敗が一転して爆笑喜劇になる劇中劇——への応答だったと考えることもできるだろう。

7 アダプテ ションとしての『最後の伝令』

ここまでは『最後の伝令』と、『陽気な踊り子』の劇中劇『アロンに帰れ』の共通点、類似点を検証し、確認してきた。最後に、これまで『最後の伝令』と『陽気な踊り子』『アロンに帰れ』の類似が、どうして指摘されなかったのかを考察してみよう。

喜劇や軽演劇、さらに商業演劇それぞれ自体に関する研究が少ないという事情があるが、こうした研究分野の遅れを除いた場合、まず考えられる理由は当時の日本人の著作権意識の未熟さである。エノケンの主演舞台には同時代の欧米の音楽喜劇映画を直接的に反映した作品が多く、例えば当たり狂言の一つのオペレッタ『フピ』（菊谷栄脚本・演出、1933年、松竹座）は、アメリカの人気ボドピリアンのエディ・キャンタ主演映画『フピ』（ソトン・フリランド監督、1930年アメリカ公開、1932年日本公開）をエノケンに置き換えた作品だ。パンフレット等のクレジットを見る限り、これが正式な著作権契約のもとに製作されたとは考え難い。現在の著作権意識では明らかに違法なのだが、当時のエノケンたちに盗作の意図があったとするのは無理があるだろう。というのも、盗作するのであれば、内容はまだしも、題名は変更するのが普通だ。『最後の伝令』であれば、日本人に馴染みの薄いアメリカ南北戦争をそのまま題材として真似るよりは、いっそ日本に置き換えた方が、観客の受けもさらに良くなるはずだ。それをしなかったのは、エノケンたちにとって、これらのアダプテ ションが、先行する欧米作品へのオマージュとして肯定的に意識されていたからではないだろうか。

次に観客側の視点で考えてみよう。『最後の伝令』と『陽気な踊り子』の類似に、当時気づいていた観客や劇評家は少なくないはずだ。しかし現在まで類似が指摘されなかった理由には、喜劇や軽演劇といった舞台娯楽に関する批評がほぼ不在だったことが大きいだろう。新聞や演劇雑誌に掲載される喜劇や軽演劇の劇評は、新橋演舞場、明治座、有楽座、日本劇場等の銀座・丸の内界限の大劇場が中心で、浅草の劇場が取り上げられることは少なかった。また劇評が掲載されても、作品の内容に詳しく触れたものは稀で、多くが喜劇俳優の演技に焦点があてられている。喜劇や軽演劇を正面から取り上げ、恒常的に劇評を掲載したのは、映画雑誌『キネマ旬報』が1933年6月に開設した、軽演劇やミュージカル専門の「ヴァリエテ」欄くらいである。

明治以降、日本の舞台や映画では海外作品のアダプテ ションは珍しくなく、その情報は一部の観客の間では知られていたが、これを盗作と非難する事例は極めて稀だった。喜劇や軽演劇の場合は、そこに情報を共有する場が少なかったという事情が加わったといえる。

さらに『陽気な踊り子』が長い間ずっと幻のフィルムだったことも、今日まで両作品の類似が指摘されなかった理由のひとつだろう。そして、より重要なのは、DVD化され日

本でも簡単に見られるようになった現在でも、両作品の類似が指摘されていないという点だ。これは、アメリカのフランク・キャプラ監督作品とエノケン作品の両方に目配せするような映画ファン、お笑いファン、研究者が、現在はほとんど存在しないことを意味する。榎本健一が『陽気な踊り子』から『最後の伝令』を思いついたように、かつては重なるところのあったキャプラ映画とエノケン作品の観客層は、いつの間にか棲み分けができ、断絶してしまったのである。その意味でも、欧米のミドルブラウンな趣味性と日本の大衆的な娯楽性を結びつけていたエノケン喜劇の射程範囲の広さに、改めて注目する必要があるだろう。

20世紀前半のエノケン喜劇をはじめとする軽演劇、ひいては大衆娯楽を研究する場合、海外作品との類似を盗作としてあげつらうのではなく、むしろ積極的に《アダプテ ション（翻案・脚色）》と解釈し、欧米から日本への大衆モダニズムの受容と変換の視点で分析することが望ましいと思われる。

* 本稿は演劇映像学連携拠点研究・公開研究会「エノケンの楽団と舞台・映画・レコード」（2019年1月30日）での口頭発表を論文化したものである。

主要参考文献

- 北の会・北の街社編『エノケンを支えた 昭和のモダニズム 菊谷栄』（北の街社、1992年）
- 井崎博之『エノケンと呼ばれた男』（講談社文庫、1993年）
- 原健太郎『東京喜劇——アチャラカの歴史』（NTT出版、1994年）
- 東京喜劇研究会編『エノケンと“東京喜劇”の黄金時代』（論創社、2003年）
- 平島高文著、原健太郎編『エノケン喜劇のドラマツルギ 榎本健一と菊谷栄が見た夢』（日本芸術文化振興会、2013年）
- 高平哲郎『アチャラカ』（ビレッジセンタ 出版局、2004年）
- 山口昌男『エノケンと菊谷栄 昭和精神史の隠れた水脈』（晶文社、2015年）

註

- 1 井崎博之『エノケンと呼ばれた男』。また原健太郎『東京喜劇 アチャラカの歴史』（NTT出版、一九九四年）で『最後の伝令』は「いわゆる〔楽屋落ち〕のオン・パレードで、軽演劇史上に残る逸品といわれている」と記されている。
- 2 前掲『エノケンと呼ばれた男』をはじめ『最後の伝令』の初演を1931年11月とした文献が多い。ただし、当時の浅草玉木座の興行は一ヶ月に三の替わりまでであったが、いずれの文献も『最後の伝令』の公演日までは記していない。また演劇博物館所蔵等、現存するプログラムを調査したが、本稿では一〜三の替わり全てを確認することはできなかった。
- 3 『最後の伝令』について榎本健一は「この作品は私が原案を出し、菊谷栄さんが最初

に書いた作品です。私の女房〔花島喜代子〕の本名「清子」の「清」と息子「鏝一」の名からとり、「清野鏝一」原作とし、菊谷さんの友人「佐藤文雄」〔のちにピエル・ブリヤント文芸部に加入〕の名を借りて発表しました。菊谷さんが左翼の傾向があった時代で本名を使えなかったのです。」(RAB ラジオ「私は菊谷栄です」取材テープ、北の会・北の街社編『昭和のモダニズム・菊谷栄』所収)としている。

- 4 映画『極楽大一座 アチャラカ誕生』はフィルムの一部が紛失していることもあってか、ビデオやDVD等で発売はされていないが、現在も度々、名画座で上演されている。
- 5 北の会・北の街社編『エノケンを支えた 昭和のモダニズム 菊谷栄』所収「最後の伝令」台本。以下、舞台『最後の伝令』の引用は全て同書から。
- 6 DVD『陽気な踊り子／アメリカン・ドリム』、販売ソニー・ピクチャーズエンタテインメント、1999年。
- 7 『陽気な踊り子』の梗概は、DVDの他に『キネマ旬報』第309号(1928年10月1日号)所収の新作紹介欄を参考にした。
- 8 エノケン喜劇のギャグの考案者が誰だったかは興味深い事柄である。共に戦後のエノケン文芸部に在籍した井崎の『エノケンと呼ばれた男』、平島の『エノケン喜劇のドラマツルギ』では、ギャグの多くがエノケン自身の考案だったとしている。また筆者が井崎氏に聞き書き(2006年)した際にも、セリフ覚えの悪かったエノケンは文芸部が書く脚本に口出しすることはほとんどなく、もっぱらギャグのアイデアを自ら提供しては活躍の場をつくるという流れが、戦前から戦後にかけてのエノケン文芸部の基本だったと聞かされた。エノケン喜劇は、身体を使ったアクロバチックなギャグから、海外名作のパロディまで様々だが、所謂ドタバタにあたる演者主体のギャグは、エノケンのアイデアに負うところが大きかったと思われる。
- 9 『アチャラカ誕生』のあらすじは、演博所蔵台本の他にパンフレットを参考とした。
- 10 昭和30年8月19日の日記。その後、ロッパは5日間で脚本を書きあげ、8月24日の朝には印刷に回している。『古川ロッパ昭和日記 晩年篇』晶文社、1989年。

本稿は以下の研究助成の研究成果の一部である。

- ・早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点、共同研究課題「栗原重一旧蔵楽譜を中心とした楽士・楽団研究」。
- ・NHK 番組アカイブズ学術利用トライアル「榎本健一関連の演劇・映像作品研究…楽士・楽団の活動分析を中心に」(2019年度第3回)。
- ・JSPS 科研費、基盤研究(C)、18K00143。

プロット表

最後の伝令 (四景)	アーロンに帰れ (二幕)
<p>テキストは北の会・北の街社編『エノケンを支えた 昭和のモダニズム 菊谷栄』(北の街社、1992年)所収の脚本「最後の伝令」(青森県立図書館収蔵)を用いた。場は脚本のト書の指示を「 」で記した。人物は脚本の配役名をそのまま、登場順に記した。『最後の伝令』は劇中劇の構造をとっており、本表の「トム」は劇中の役柄〈トム〉だけでなく、〈トム役俳優〉も意味する。脚本では、同じ俳優が別の役を演じる際も、主となる配役名で記されているが、本表では理解を助けるために適時()で補った。『アーロンに帰れ』と類似したギャグは下線を引いた。</p>	<p>テキストはDVD『陽気な踊り子／アメリカンドリーム』(ソニー・ピクチャーズエンタテインメント、1999年発売)収録の映画『陽気な踊り子』の中で劇中劇『アーロンに帰れ』の上演場面は2回登場する。それぞれを区別するため、文章末に1回目は(F) first、2回目は(S) secondと附し、さらに2回目はゴシック体で記した。また人物は、比較しやすいように『最後の伝令』に従った。『最後の伝令』と類似したギャグは下線を引いた。</p>
<p>第一景 場：「割綴帳前」人物：お父さん(メリイの父親で、北軍の老将軍)、トム、監督の声(声のみ)。</p> <p>1. 舞台の両袖から、お父さんとトムが各々登場。お父さんがトムに、まだ舞台の仕度が整っていないのに幕が開いたこと(トムは俳優であり幕の担当)で抗議する。</p> <p>2. 場をつなぐために、トムが即席の口上を述べる。</p> <p>3. 割綴帳が開いて、舞台が始まる。</p>	
<p>第二景 場：「老将軍の家の前／上手に将軍の家 田舎家の入口／正面奥には煉瓦の塀」。(このト書は分かりにくい。舞台『アチャラカ誕生』の写真を見ると、第二景は老将軍の家の庭で、上手に将軍の家と玄関、正面奥に庭と通りを隔てる煉瓦塀がある。)人物：お父さん、メリイ、監督、トム、大道具、蔭の声(裏方の声)、ロバート(村の青年)、子役(お父さんの息子、メリイの弟)、ジャック(トムの戦友)。</p>	<p>第一幕 老将軍の家の庭。上手に将軍の家と玄関。正面奥に煉瓦の塀。塀には門と木の扉がついている。庭にはひまわりが咲いている。</p>

<p>1. お父さん役の俳優が「役場の小使」役で登場し、お父さん（老将軍）宛の召集令状をメリイに渡す。戦争が激しくなっていることを知ったメリイは、恋人で兵隊のトムが気がになり、周囲を探すが、見当たらない。</p> <p>2. トムは舞台袖で音響効果を担当し、風の音と雨の音を出している。監督に呼ばれて、大慌てで舞台に出ていく。</p> <p>3. 舞台上に登場したトムを見つけ、メリイが駆け寄り。台詞を忘れたトムに、下手の袖にいた監督が台詞をつける。トムは、プロンプタの監督が教える台詞を聞き間違えて変な風に喋ってしまう。</p> <p>4. 戦場へ赴くトムとメリイが別れの口づけをする。監督の「本当にしちゃいかんよ」を台詞と勘違いしたトムが、そのまま繰り返して喋る。</p> <p>5. トムが舞台に出たので、効果の風や雨の音が止んでしまい、メリイ「今日の様な風の強い日だったわねえ」等の台詞が、意味を失ってしまう。</p> <p>6. 恋人達の別れの場面で、予定されていたヴァイオリン音楽「トロイメライ」が流れない。舞台袖をまくと、音楽担当のお父さんが軍服姿のままでうどんを食べている。お父さんは慌ててヴァイオリンを弾く。</p> <p>7. トムは、監督の教える台詞だけでなくト書の指示も台詞と勘違いして喋ってしまう。腹を立てた監督とトムが、舞台上で大喧嘩を始めたため、他の俳優や道具達が出て来て二人を止める。</p>	<p>1. 幕が上がる。監督の指示で、<u>上手より、星条旗を先頭に銃剣付の銃を携えた軍隊（一人が旗を掲げ、もう一人〔トム〕が、銃剣を並べただけの小道具を担いで動かし、軍隊行進にみせるトリック）</u>が、<u>塀の向こう側を行進する。</u>（F）</p> <p>2. <u>有名なヴォードヴィリアンのドン（劇団員はドンとトムが同一人物とは知らない）が、劇場に姿を見せないトムの代役をつとめる。</u>ドンは、直前のミンストレル・ショーで顔を黒塗りにしたままで舞台上がり、<u>星条旗を抱えた旗持ち役や銃剣トリックの行進の際に、わざと黒塗りの顔を見せて観客を笑わせる。</u>（S）</p> <p>3. <u>音楽係が物を食べながら、器用に、片手でピアノを弾きつつ、もう一方の手で行進ラップを持って吹く。</u>（F）</p> <p>4. 監督の合図に従って、メリイが老将軍の家の玄関から出ようとするが、なかなか扉が開かない。そこでメリイは大道具の家の袖から手だけを出し、ドアノブを捻って扉を開ける。しかし、今度は衣裳が扉に引っかかり上手く出られない。（F）</p> <p>* フィルムの一部が紛失しているためか、これ以降の（F）では、場面の欠落や不自然な編集が度々見られる。例えば、家の前で、お父さんとメリイが会話しているかと思うと、次のカットではお父さんとお母さんが会話している。メリイ役とお母さん役の女優は、一人二役だが、二人が早替わりで入れ替わる場面が存在しないため、見ていると混乱する。これはフィルム紛失による、早替わり場面の欠落だろう。</p>
--	---

8. メリイとトムは再び別れの姿勢に戻る。監督が雪を降らせるように指示を出すも、蔭の音が、まだ注文した雪が届かないと告げる。仕方ないので雨を降らせることにする。
9. 第四景に出演するはずの村の青年ロバトが、出を間違えて登場する。ロバト「メリイさん 大変だ！〔略〕あなたの恋人 トムは戦死をしました 名誉の戦死です」、トム「バカ 何をいつているんだ トムは僕だよ〔以下略]」。ロバトは監督に叱られて退場する。
10. 退場する際にロバトが舞台袖をまくると、お父さんがヴァイオリンを弾いているのが見える。お父さんはロバトに「おい ロバト！ お客さん泣いているだろう」と訊ねる。
11. メリイがトムに、妊娠していることを告げる。トム退場。
12. お父さんが登場しないので、監督が声を掛ける。煙草をくわえ、髭を上下逆さまに付け間違えたお父さんが袖から出て来る。
13. メリイとお父さんの別れの挨拶。メリイは家の中に入って、お母さんに早替わりして再登場。お母さんとお父さんの別れの挨拶。その後、お父さんの求めに応じて、一人二役のメリイとお母さんが慌ただしく登場・退場を繰り返す。
14. 子役が顔を出し、監督に、出番はまだですかと訊ねる。子役のことを忘れていた監督が、慌てて舞台上に登場させる。
15. 子役とお父さんの別れの挨拶。大声で
5. 家の玄関から、メリイとお父さんが出てくる。お父さんは、勇ましく剣を抜いて勝利の誓いを立てようとするが、剣が長くてなかなか鞘から抜けず、仕方なしに剣を抜かずに腕だけを掲げて誓いを立てる。(S)
6. 出征するお父さんとメリイが別れを惜んでいる。(F)
7. 客席。耳の遠い初老男性が、大きな筒のような補聴器の一方を自分の耳に当て、もう一方を隣の席の中年女性（妻か？）に向けて、何と言う台詞かをしつこく訊ねる。中年女性は、補聴器が邪魔なのと、しつこく訊かれることにウンザリした様子で答える。(F)
8. お父さんが、メリイにお母さんと呼んで来るように言う。メリイ役女優は家の中に入って、舞台袖で早替えてお母さんになる。すると舞台袖の幕が開き、着替えている姿が丸見えになる。(S)
9. お父さんとお母さんが別れの挨拶をしている。煉瓦塀の向こうを軍隊が行進する。軍隊のトリックを担当していたトムが、誤って舞台袖で控えていた俳優の軍帽を銃剣の先に引っかけてしまい、そのまま行進をつづけてしまう。(F)
10. 舞台袖で監督が、お父さんに剣を抜くように指示するため、自らの腰にさげた剣を抜いてみせる。それを見て、お父さんが腰の剣を抜き、勇ましく掲げる。監督は、剣を掲げたポーズを取る際に勢い余って壁を強く叩いてしまったので、頭上から中身の入った布袋が落下し、頭にあたる。(F)

- なく子役が、涙を拭いたハンカチをしぼると水が滴れる。
16. お父さんが「あ 今鳴るラッパはあれあ 八時半 あれに遅れちゃ 一期の不覚」と決め台詞を発するも、お母さんが「まだ鳴りゃしませんわ」と嗜める。子役が袖に走って、ヴァイオリンを弾いていたトムにラッパを吹くように告げる。トムは、ラッパを手に取り、吹こうとするが、音が出ない。監督がジャックを呼んで、ラッパを吹くように命じる。ジャックはスイカを食べながら登場する。
17. ようやく小道具の雪が到着し、蔭の声が降りし始める。雪降る中、改めてお父さんと別れの挨拶を交わす家族。メリイ役俳優は、再び、お父さんの求めに応じて、お母さんとメリイの早替わりを三度繰り返す。お父さんは戦地へ赴く。退場。
18. 出征の行進ラッパが流れる。ジャック一人の演奏では足りないので、お父さんも手伝うが、お父さんはラッパを吹くよりも、先ほどの食べかけのうどんを食べるのに忙しい。
19. 舞台の背後の煉瓦塀の外を、銃剣付の銃を携えた軍隊（銃剣を並べただけの小道具を、一人で担いで行進にみせる）が通る。お父さんがラッパを吹きながら馬上姿で通り過ぎる。すると、下手の煉瓦塀の書き割りが倒れる。軍隊が実は銃剣を並べただけトリックで、馬上姿も張り子の馬を使っただけなのが観客に丸見えになるが、俳優達は気づかない。監督が「塀が倒れた！」と叫ぶと、ようやく全員が事態に気づき、煉瓦塀の書き割りを立て直して、行進を
11. お父さんが煉瓦塀の門の扉を開けて出ようとする、タイミング悪く、扉の向こうで軍隊のトリックを担当していたトムが丸見えになる。慌てたトムは、銃剣の小道具ごとひっくり返る。(F)
12. お父さんとお母さんが別れの挨拶をしている。悲しみにくれたお母さんが、大きく腕を上げて天を仰ぎみると、胸もとのボタンが外れ、前がはだけてしまう。お父さんが煉瓦塀の門の扉を開けて出て行こうとすると、顔を黒塗りにしたトム役のドンが軍隊のトリックをしているのが丸見えになる。(S)
13. お父さんは門から出ようとするが、銃剣の小道具に足を取られて上手く出られない。(F)
14. 去って行くお父さんを、煉瓦塀越しにお母さんが見送っている。そこに、第二幕で登場する予定のトムが、出番を間違えて登場する。トムは負傷した様子で、手で胸を押さえながら登場する。お母さんがトムに、出番はまだ先だと注意し、トムは慌てて退場する。しかし舞台上に銃を置き忘れたトムは、四つん這いになってこっそりと銃を取りに戻ってくる。(F)
15. 音楽係が売り子になって客席を回っている。出を間違えたトムを見て大笑いする男性客三人（実はいずれもトムの友人で、ブロードウェイのプロデューサーなど）に、音楽係が「あんたら田舎モンかの？ 行儀が悪すぎるだ」と注意する。(F)
16. お母さん退場（舞台袖でメリイへ早替わり）。すると門から、北軍の指揮官が入って来る。指揮官が軍服についた

何とか終らせる。暗転。

砂埃を払う。家からメリイが出てきて、話をする。指揮官は、南軍の追っ手から逃げてきたこと、重要な「文書」(paper)を彼らから隠す必要があることを告げる。文書を手渡されたメリイがそれを読む。(F)

17. 門から北軍の指揮官が入ってくる。指揮官が軍服についた砂埃を払うと、あまりの埃の凄さから、ちょうど家から出て来たメリイがむせてしまう。(S)
18. 客席。耳の遠い初老男性が、隣の席の中年女性に台詞の内容を訊いている。中年女性が舞台上に夢中で返事をしないので、男性は反対の席に座っている少年(息子か?)に訊ねる。しかし、少年もまた舞台上に夢中なので、男性は少年の耳を引っぱって自分の方を向けさせ、無理矢理答えさせる。少年は、文書の内容を伝える。「借金取りが来た ピアノを隠さねば！」と。(F)
19. メリイが指揮官を家の中に隠す。するとそこに南軍の兵士数名が駆け込んでくる。南軍の指揮官(お父さん役との一人二役)は、抜いた剣を鞘に収めようとするが、上手く入らず、剣と鞘をその場に放り投げる。(F)
20. 客席。少年が鼻をほじっている。それを見た中年女性が、少年を叱りつけ、腕を掴んで止めさせる。耳の遠い初老男性が、大事な台詞でもあったのかと勘違いし、またもしつこく女性に訊ねる。(F)
21. 南軍の兵士達が立ち去る。その様子を塀越しに確かめようとしたメリイのスカートがめくれ、客席に下穿きが丸見えになる。(F)

	22. 隠れていた北軍の指揮官が、家から出て来て、「祖国の栄光のために！」と勝利を誓う。幕。(F)
<p>第三景</p> <p>場：「塹壕」人物：監督、ジャック、トム、兵士 A、兵士 B、お父さん、兵士 F、兵士 C、兵士 D、大道具、女優 A。</p>	
<ol style="list-style-type: none"> 1. 薄暗い照明の中をお父さん、メリイ、トム、ロバート他が大道具の切り出しを持ちだして飾り付けている。準備が整ったことを確認した監督の指示で照明が灯され、塹壕の景が始まる。 2. トム、ジャック、兵士 A、兵士 B が最前線の苦勞を語り合う。敵の砲弾が爆発する音、味方兵士の屍が飛んでくるが、トム達が驚かずに会話をつづけるので、監督が驚くように指示を出す。しかし、味方の大砲に大袈裟に驚いたりで上手くいかない。 3. 敵（南軍）が目前まで迫っていることを知ったお父さん（老将軍）は、部下のトム達と水杯を交わす。小道具の酒が本物にすり替わっていたため、呑んだ全員が嘔を出す。 4. お父さんの合図で総攻撃に出るが、全員酔ってふらふらとしている。お父さんと兵士が下手の袖へ飛び込んだ際に見切り幕が外れてしまい、脚立の上でサテライトを操作する照明係、燻した煙を煽ぐ監督、ブリキ板を叩いている子役が丸見えになる。お父さん達は慌てて見切りを直す。 5. トム、ジャック、兵士達が塹壕の切り出しの向こうへ飛び込む。直ぐに、北軍の帽子を南軍に取り替え、敵役で立 	

ち上がって姿を見せる。と思うと直ぐにまた一同しゃがんで帽子を取り替え、元の北軍兵士役で立ち上がる。このやり取りを繰り返すうちに、俳優たちも敵味方どちらを演じているか混乱してきて、北軍の帽子で南軍の台詞を喋ってしまう。

6. 監督が、酔って芝居がデタラメになってきた俳優達を叱る。
7. 伝令役の俳優が出て来ないので、監督が大声で探していると、その俳優は面会に来た女性と出て行ったと大道具が告げる。仕方がないので、急遽、大道具が伝令役で舞台にあがることになる。
8. 伝令役を終えた大道具が袖に下がると、女優 A が演技を褒める。照れた大道具は側の綱につかまり、躓いてしまう。綱は切り出しを吊っていたため、塹壕の切り出しが天井へと上がってしまう。北軍・南軍の二役を演じていたトム達のトリックが丸見えになる。一同慌てて切り出しを直す。
9. 負傷したお父さんが、軍司令部宛の手紙をトムに託す。老将軍（お父さん）に、メリイと結婚して仲良く暮してくれ、と告げられたトムは、つい「何と理解のあるお父さんでしょう」と言っ
てしまい、「（お父さんじゃなく）閣下だよ」と窘められる。
10. 手紙を届けるためにトムが立ち上がると、死んでいたジャックが倒れたままラップを演奏する。歩きかけたトムを、敵の銃弾が貫く。トムは負傷したまま、ふらふらと退場。暗転。

<p>第四景</p> <p>場：「池の端の教会の前」「下手に池 小さい棧橋 上手に教会の入口 屋根に鳥」</p> <p>人物：監督、牧師、田舎女 A、田舎女 B、田舎女 C、メリイ、子役（メリイの弟役）、ロバート、トム、大道具。</p>	<p>第二幕</p> <p>第一幕と同じ老將軍の家の庭。空から激しく雪が降り、地面にも降り積もっている。しかし、庭の門付近では、第一幕の装置の見事なひまわりが一本残ったままになっている。(F)</p> <p>ひまわりが二本残ったままになっている。(S)</p>
<ol style="list-style-type: none"> 1. 第三景の冒頭と同じく、全員で大道具を飾っている。準備が整うと、監督の合図で照明が灯される。 2. 教会から、涙にくれた田舎女 A、B、C、次いで赤ん坊を抱いたメリイと子役、最後に牧師が鐘を叩きながら出て来る。 3. 監督が牧師に、鐘を持って出て来てはダメだと注意すると、牧師は慌てて教会へ戻って鐘を置いてくる。 4. 教会の前で、牧師が女達にお悔やみを言う。鐘が鳴り響き、田舎女三人と牧師が去る。 5. メリイが子役（弟役）に、「お前 草臥れたろう それに今日はこんなに雪空で寒いんだもの」と言うと、子役が「姉さん 寒い？ 僕は暑くてうだりそうだ」（上演が夏のためか？）と返答してしまう。メリイは子役を先に帰らせる。退場。 6. 泣き出した赤ん坊を、メリイがあやす。教会の鳥の啼き声が、次第に子守唄になる。 7. ロバートが走って来て、メリイにトムの戦死を告げに来る。退場。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 幕が上がる。上手の家の装置の影からトムが、バケツに入った小道具の雪を手で掴んでは投げ掴んでは投げしながら、雪を降らせている。熱心なあまり、トムは家の装置の影から姿を出して雪を降らせている。そこに靴が飛んできて<u>トムに当たり</u>、トムは袖に引っ込む。(F) 2. 音楽係がピアノにもたれて寝ている。上手から南軍兵数名が登場、銃で応戦しながら下手へ後退する。北軍と南軍の激しい銃撃戦が始まる。銃声に驚いた音楽係は椅子から転げ落ち、慌てて起きあがってピアノを弾き始める。(F) 3. 激しい戦闘のあまり、雪降る中を、北軍と南軍の靴や軍服が飛び交う。上手より南軍の兵士達が登場、銃で応戦しながら下手へ後退する。仲間の銃剣に尻を刺されて飛び上がる者もいる。(S) 4. 客席。母親、男の子、女の子の三人組。男の子が舞台の南軍兵を指さして「ママ パパだよ！」と叫ぶ。盛んに声援を送る三人。南軍兵（父親）は、嬉しいような困ったような表情で、演技の合間に手を振ったりして、声援に応える。(F)

8. メリイは、トムの後を追って自殺の決意を固める。ただし赤ん坊まで巻き添えにするのは忍びなく、池の上に流れてきた盥に赤ん坊を乗せる。日本式の鐘がボンと鳴り、メリイは池に飛び込む。
9. メリイは浮きつ沈みつしながら、口から水を吹いたりしている。そのうち池の水布に手をひっかけて、水布を倒してしまふ。葦笛で赤ん坊の泣き声を出しながら、盥を押さえているお父さん、バケツの水を口に入れては吹き出すメリイが丸見えになる。監督が慌てて飛び出しきて、水布を直す。
10. メリイは再び赤ん坊を抱いて池の岸に立つ。そこに重傷を負ったトムが登場する。再会したトムは、先ほどの水杯で酔っていることもあり、「メリイか……大きくなったな」等々、台詞を間違える。
11. トムは、お父さんから預かった手紙をメリイに渡し、軍司令部へ届けてくれるよう頼む。メリイが手紙を読みあげる。手紙には「来月三日にて起源も切れ申し候に付 至急 利息を」とあり、トムが誤って借金取り立ての手紙を渡したことが分かる。
12. 舞台の上から雪を降らせているロバトが、失敗して大量の雪を落としてしまふ。それに対して、トムが文句を言う。
13. 息も絶え絶えのトム。と、雪が降り止む。監督や大道具が出て来て、雪がなくなったと言って、舞台上の雪をかき集めて持っていく。
5. 上手にある家の扉が開き、メリイが出てくる。家の装置の影にいたトムがそれに気づき、バケツを片手に雪を降らせながら、舞台まで現れてメリイに声を掛ける（出番のタイミングを訊いている？）。メリイに窘められたトムは、半ばやけくそ気味にバケツの中の雪を放り投げて去る。(F)
6. 家の扉が開き、メリイが出てくる。頭上から大量の雪が落ちてきて、衣装が雪まみれになる。(S)
7. 上手の家の装置の影から、顔面黒塗りのドンが出て来て、舞台上の雪をバケツに集め、再び降らせる。(S)
8. 第一幕に登場した南軍の指揮官が現れ、メリイを見つけて「いたな！」(A ha!)と叫び、捕まえる。抱きかかえられたメリイのスカートがめくれ、下穿きが丸見えになる。やはり第一幕に登場した北軍の指揮官が家の中から現れ、敵指揮官に「いたな！」(A ha!)と叫んで助けに入ろうとする。勇ましく剣を抜いた北軍指揮官だが、降ってくる小道具の雪の量が多くて、つい口の中に入れてしまい、それをペッペッと吐き出すので様にならない。(F)
9. 南軍の指揮官に抱きかかえられたメリイのスカートがめくれ、下穿きが丸見えになる。北軍の指揮官がメリイを助けると、上手より北軍の兵士達が銃を撃ちながら登場する。南軍の兵達は、応戦しながら下手へとさがり、退場。銃の火薬の音が大きくて、メリイと北軍指揮官は、兵士達が発砲する度に驚く。(S)
10. 難を逃れたメリイ。再び北軍と南軍の

14. 末期の水を求めるトムに、メリイは池の中のバケツを持って来て飲ませる。トム「酔醒めの水はいつでもうまいな」とつぶやく。
15. 雪に混ざって靴が落ちてくる。
16. メリイとトムは、手を取り合って泣いている。どこからか雪が燃え始め、二人は慌ててバケツの水で火を消し、再び愁嘆場のポーズをとる。
17. 雪に混ざって綱が落ちてくる。怒ったトムが綱を手に文句を言う。大道具が綱を引き上げると、綱を握ったトムも一緒に天井へと上がっていく。それを見てメリイが驚くと、綱を放したトムが落ちてくる。トムはふらふらしながらも、もとの愁嘆場のポーズをとる。
18. ロバトがやって来て、二人に、北軍の勝利を告げる。トムが万歳と叫ぶと、音楽「ヘル・コロンビヤ」が流れ出す。
19. 監督が「おい 幕だ 幕だ」と舞台裏に指示すると、ベルが鳴り、幕が静かに下りて来る。が、機械の故障で途中で止まる。
20. 断末魔の苦しみだったトムが、起き上がり、幕に飛びついて無理矢理に幕を下ろし、幕の下敷きになる。

- 激しい銃撃戦が始まる。上手の家の装置の影からトムが、バケツ片手に雪を降らせながら顔を出し、メリイに、自分の出番はまだかと訊ねる。メリイは、今こそ出番だと答える。トムは、手にしていたバケツを放り投げ、右手に星条旗を抱え、左手で胸を押さえながら（第一幕 14では右手で右胸を押さえていたが、今度は左手で左胸を押さえて）登場する。（F）
11. 客席で売り子をしていた音楽係が、トムの登場に気づき、腰にぶら下げていたラッパを拭く。（F）
12. トムは、手で押さえていた胸を左から右に直し、庭の真ん中に倒れ込む。倒れる際には、地面の様子を一旦確かめて、ゆっくりと倒れ込むなど態とらしさが見られる。（F）
13. メリイはトムに駆け寄り、彼を腕に抱く。トムはメリイを強く抱きしめようとするが、メリイはその手をそっと振りほどく。しかしトムも負けじと抱きしめ直そうとするが、さらにメリイがその手を振りほどき、両手を動かせないように押さえ込む。（F）
14. 息絶え絶えのトムがメリイに「愛してるよ」と告げると、メリイはトムに最後の口づけをする。トムはそのまま息を引き取り、ガクッと首を垂れるが、次の瞬間再び頭をもたげ、「愛してる」と告げ、メリイは仕方なしに口づけをする。このやり取りを繰り返すトムに腹を立てたメリイは、「バカ 早く死んで！」と言う。トムは大袈裟にのたうち回って死ぬ。（F）
15. メリイが「かわいそうに…キスしたと

たんに死んだわ」と決めの台詞を言って、腕を哀しげに広げると、舞台袖の監督もそれに合わせて大きく腕を広げ、その腕が壁を叩いて頭上から雪の塊が落ちてくる。(F)

16. 上手の家の装置の影から顔を黒塗りにしたドンが、バケツ片手に雪を降らせながら顔を出し、メリイに、自分の出番はまだかと訊ねる。メリイの合図でドンが登場する。ドンは頭にマフラーを巻き、足はスキー板を履いた滑稽な格好で、態と大袈裟に苦しがってみせながら、倒れ込む。駆け寄ったメリイの腕に抱かれながら、ドンは口づけする間もなくあっさり死ぬ。(S)
17. 南軍の指揮官を捕えた北軍兵達が登場し、勝利を宣言する。メリイは、トムが持って来た星条旗を振って勝利を喜ぶ。幕。(F)
18. 直ぐに幕が上がってカテンコル。倒れていたトムは、上半身だけを起こして観客に挨拶をする。再び幕が下がってきて、トムは幕の下敷きになる。(F)
19. 大笑いする客に腹を立てたメリイが、芝居を中断し、客席に向かって「何笑ってるの？ コメディじゃないのよ」と激しく怒りをぶちまける。(S)
20. その間に幕が下りてしまい、メリイは一人幕の前に取り残される。床に這いつくばり、幕をくぐろうとするが上手くいかない。客席からはスカートの中が丸見えになる。(S)